



虹の旗 1にのほた17,8,9月号 2017年7月5日発行 通巻第223号 ■制作/京都工芸繊維大学生協学生委員会広報局 ■発行/京都工芸繊維大学生生活協同組合理事会 住所:〒606-0962 京都市左京区松ヶ崎御所海道町 電話:075-781-5359 ■印刷/株式会社きかひしごら

楽しくなる、予感。

NIJ no HATA
PRESENTED BY
KYOTO INSTITUTE of
TECHNOLOGY
COOP STUDENT COMMITTEE
PUBLIC RELATIONS DEPARTMENT

虹の旗



特集: ShortShort



それは揺蕩うシャボン玉のように。

虹の旗 Vol.223
2017.7,8,9

CONTENTS

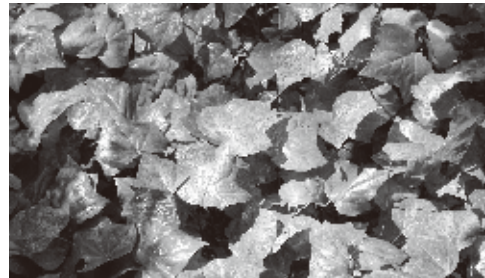
特集

Short Short

02 INTRODUCTION

03 SHORT SHORT

HIGHLIGHT



Short Short

特集

ShortShort

僕がこれまで京都工芸繊維大学で撮影した写真をテーマに、その写真から感じとった内容で記者に文章を書いてもらった。僕はその写真をどのような気持ちで撮影したのかを記者には伝えないし、まず、なにが僕にシャッターを切らせたのか自身でもよく分からない。だけど、僕はなにかをその写真の中に閉じ込めたのだと思う。僕はその風景のなにかに感動し記録した。

この特集は実験。僕が閉じ込めたなにかを探す、他者への依頼。僕はそのなにかを知りたいし、教えてほしいし、共有したい。そして、いつも目に入ってくる風景を違ったふうに見てみたい。僕のそんなわがままな特集。

Editor & Photographer 下出大貴 Designer 白倉菜々子
Writer 安藤大貴 / 打谷拓巳 / 北浦綾乃 / 坂根拓海 / 角居風子 / 武内真之 / 中澤誠 / 光園和宏 / 八木まどか / 矢野恵美 / 山田祐輔

「あーだこーだ」

ないものねだり。
暑いと寒さが恋しくなるし、寒いと暑さが恋しくなる。
寒い時は着込めばいいし。暑くてもこんなに齒はガクガクしないし。
最近暑いのだな。早く冬が来てほしい。
でも、あの授業終わり、寒いって叫んで見上げた空をふと思い出すんだ。
あんなに空は青いのに。なんでこんなに私は凍えてる？
結局いつでもしんどいことは付き物で、
毎日毎日ファイティング。



「チ
ユ
ー
リ
ッ
プ
」

名も知らぬ君へ。
いつも僕の横を通り過ぎる君へ。

僕のことを君は知らないかもしれないけれど。
僕も君のことは何一つ知らないけれど。
僕の目が君を映し出す時には君は去って行くけれど。

僕の見る後ろ姿の君はいつも長い影を落としているのに。
僕は見守るしかできない。
それでいて目をそらすことも出来やしない。
瞬きもできない僕は愛を伝えることもできなくて。

それでも君が振り返ってくれたなら。
せめて僕に気づいてくれたなら。
もしも君の目を見つめることが出来るなら。

そうすれば君の心を照らせますか。





「パイロット水」

面白いものを、見せてやると言われてやってきたのは夜中の大学だ。

彼は普段立ち止まることのないような場所で突然立ち止まった。そしておもむろにパイロット管と書かれた水道管のバルブを回し始めた。しばらくすると「うわっ！」という声とともに勢いよく水が出始めた。

「くそっ！ちょっと飲んじゃったやん。」

「これが君の言う面白いものかい？」

そんな僕の質問も意に介さずにバルブで水量を調整しコップに水を注いでいる。注ぎ終わると噴き出した水によって濡れた顔を拭いてこっているのだ。

「面白いのはここからや。」

そして水の入ったコップを地面に置く。

「何だ？なんにも起きないじゃないか。」

彼は手で僕の言葉を制し、靴からベットボトルの水を取り出し、その水をドボドボと足元にこぼした。

するとコップがひとりでに傾き、彼のこぼした水の方に寄っていった。ついでに彼の濡れた髪の毛の方を向いている気がする。

「これはパイロット水って言うねんて。何かに操作されてるみたいに近くの『水』に寄っていきんや。俺も人伝いに聞いただけやから理由は全く知らんけど。」

目の前の現象を受け入れきれずに僕は言う。

「操作……からパイロットね。」

「まあ巷では水の中にいる微生物の作業ちゃうかって話。」

彼の話は全くあてにならないが実際に起きたことなので信じざるを得ない。話もそこそこにして、家に帰ることにした。

脱いだ服が動き出したらたまったものじゃないので僕はシャワーを浴びて服も洗濯した。

それ以降気味が悪くてあの場所には近づかないようにした。

異変というか違和感に気付いたのは数週間後だった。その違和感の正体は彼をよく水辺で見かけるようになったことだ。

「コイの池」

揺れない水面に今日も釣糸を垂らす。

私はここで長い間、コイなるものを釣り上げる瞬間を待ち続けている。

いつだったか、ここで同じように待っていた奴が教えてくれたのだ。

ここでは、コイが手に入るのだと。この澄み切った水面に大きな波紋

が生じた時、コイが釣り上げられるのだと。

そのコイというのにも種類があって、明るい色、暗い色、なめらかなものゴツゴツしたもの……、というふうには、様々な色形をしているらしい。食べて美味しいものも、そうでないものもあるらしい。

私が釣り糸を垂らしてから今に至るまで、他にもここに何人かがコイを釣りに来た。

あるものは、何もかからないのに痺れを切らして別の池を探すと行って行った。

またあるものは、何かを釣り上げたものの、これはコイではないと怒って去って行った。

わたしは未だ、何かを釣り上げるところか、水面が動く様子を見たことすらない。

いや、いつだったか、一度だけ、ほんの少しだけさざめいたことがあったか。

ちょうど今、美しくこの水面を飾っている黄葉が、いちばん緑色に輝いていた頃であったか。

水面に映る空の青も、今よりもっとと深く、見つめているうちに吸い込まれてしまうような錯覚に陥った、その瞬間だった。

私も、かつての旅人たちのように、この場を去ろうかと考えたことがある。しかし、この限りなく透明で周りのすべての色を受け入れ、優しく反射する水の塊は見飽きることがなく、ついもう少し、もう少しと長居してしまっている。それに、た

た一度揺らめいた水面のあの神秘的な様子が、なぜか頭を離れないのだ。コイが釣れる時には、もっと大きな波ができるに

違いない。それは、きつとわたしの想像を超えて美しい景色だろう。そして、こんなに澄んだ池から釣れるコイは、この世のものとは思えぬほどに美しいに違いないのだ。……

物思いにふけりながらなんとなく眺めていた水面に、黄色い葉が落ちた。その衝撃にか、かすかに生まれた波紋は、しかし周囲に広がることなく消え去った。



「蓋」

俯いて生きる僕にとってそれはとても見慣れた存在なわけだが、僕はそれが何らかの蓋であるということ以外何も知らないのである。いかなんせんそれは固く閉ざされており、どうやら何らかの専門職の人間を除きその蓋を開け内部に侵入することは許されていないらしいのだ。しかし、それが蓋という役割を果たしている以上、その向こうには蓋をさるべきものが存在しているということは明らかである。

あとは、可能性の話になるわけだが、一説によると、その蓋の向こうには下水道と呼ばれる空間が広がり、我々が垂れ流した尿や生活排水、産業排水、その他諸々の汚い水が臭気を発しながらどうどうと流れているらしいのだ。有り得るな、と僕も思うわけだが、確認する機会が未だ訪れないので、これはまさしく可能性の話。



可能性の話をする、それはもう、キリが無い。

その蓋の向こうには、人が住んでいるかもしれない。雨風を凌ぐという人が暮らす場における最大の条件を満たしている上、意外と暖かそうなので、住居として使用されていても全く不思議ではない。

その蓋の向こうには、地球の裏側へと続く深い深い穴があるかもしれない。地球はどうやら丸いらしいので、その穴を降り進んでいくと、いずれは異国の人たちに逆立ちをした状態で出会うこととなるだろう。

その蓋の向こうには、ただの真つ暗な闇が広がっているかもしれない。我々がうっかり闇に落ちてしまわないように蓋をしてあるのだとしたら、蓋がやたらと頑丈そうな素材で出来ていることにも納得がいく。

可能性の話をする、それはもう、キリが無い。

可能性は大きく膨れ上がり、果ては僕の視界を塞ぎ、僕は車に撥ねられて死ぬだろう。それがとても怖いので、僕はあの忌々しい蓋を地面から剥ぎ取り、首を内部に突っ込んで中身を暴き、さっさとこの何の生産性もない可能性の話を終わりたいのだ。

知らないということは怖いことだから、僕は知らなければいけない。その蓋の向こうを。知らないことを。早くしないと現実世界の僕は死に、僕は可能性の住民になってしまう。だから一刻も早く、蓋を開けなければ。

「明日」

炎天下

風凧ぎ止まるプロペラや

流体力学

課題出さなきや

「光の海に
影の橋」

「もーいーかい」
「まーだだよ」

思えば私が陰に隠れるようになったきつかけは
こんな些細なことだったのかもしれない

影は至る所に姿をなし、私を誘い込む
ここにも、あそこにも、あんなところにも

陰は本当に過ごしやすい

誰からも期待されないブレッシャーのなき
ひとりぼっちで好きなことができる自由さ

私の居場所はきっとここだ
こっちの方が幸せに決まってる

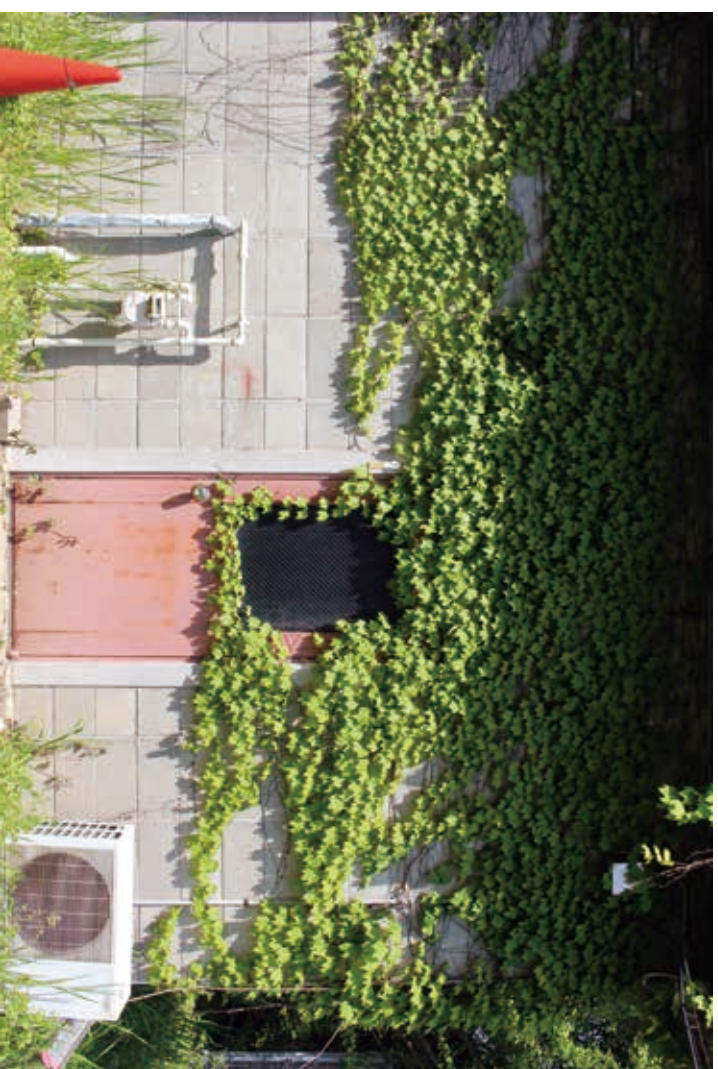
なのに、なににどうして私の頬は濡れているのだろう

そうか、私は日向に行きたかったのか

影にしか目がいかなかったこの場所も、こんなに光で溢れてる
自分を変えるのはたった一言、それでいい

「もーいーよっ」





「アツクホツクス」

「ここにきておもうと、これくらいだったのかもわからない。」

「なぜ、僕はここに閉じ込められているのか。」

「ドアのガラスから差し込む光が僕に暗闇を教えてくれる。」

「でもこのところは、光の量か心なしか少なくなっていく気がする。」

「いずれ差し込む光はなくなってしまう。」

「僕は闇の中にひとりではいられないのだろうか。」

「絶えず闇にそとへ、室外機の排熱が僕の耳から色を奪っていく。」

「時々、パイプを流れる水の音が聞こえる。」

「この音をせめて聞いてほしい。」

「自分をくっつけている大事なものをかぎ取り出してどこかに流れていくものだ。」

「おつ、僕はかつての自分を思い出すことができてもない。」

「たとえどこを辿ることかできてもいいとして、おつ、」

「それはおつ君の自分ではなないだろう。」

「でも、僕はどこから出ることを望んでいない。なぜなのか。」

「らくらくちん」

「僕はここまで歩いてきた。」

「言われもままに歩いてきた。」

「しかしここはどこだろう。」

「進むべきはどこだろう。」

「気づいた途端、」

「左右も上下もわからない。」

「どちらが前かもわからない。」

「みんなは気にせず進むけど、」

「歩き方すら忘れてた僕は、」

「そのまま空へ落ちていく。」

—— 夜の空に遊ぶ星は、一体どこから来るのだろうか。 ——

あれは高校二年の春先のことだっただろうか。

夜の帳が西の空にかかるころ、私はいつもの帰り道を辿っていた。

三月の上旬の京都の風はまだまだ冷たく張りつめて、鼻の奥につんとしみる。

私は一週間の疲れが詰まった鞆を肩に食い込ませながら家へと鉢を引きずっていった。

まだ時間も早いというのに、街の喧騒は嫌に煩く、あちらこちらで赤い顔をしたスーツ達が酒の臭いを纏いながら騒いでいた。

なんか疲れたな、いつそこからふっと消えてしまいたい。そんなことを

思いながら人っ気のない路地に潜り込むと、私はそこでふと足を止めた。路地を曲がったすぐそこに白猫が何かを待っているような素振りや暇そう

に佇んでいたからだ。その白い猫は少しだけ金色がかった毛並みを揃えながら、どこか浮世離れたような雰囲気を感じていた。

普段ならば猫など無視して帰路を急ぐところだが、その日は不思議と暫くその猫を眺めていたい気分になった。

やがて猫はこちらを向くと、少し会釈をするようにしてから、路地の奥へと歩をすすめていった。その頃には私はすっかりこの猫の不思議な魅力に

誘われていて、自然と後を追うことにきめた。この猫が、私を小学生の夏休みのような非日常に連れて行ってくれる。そんな気がしたのを覚えている。

細い路地で切り取られた空の下を右へ左へとしばらく進むと、気が付いた

私はブロックが積まれた壁の前に立っていた。白猫はその壁の前につく

とするりと穴の中へ入っていった、その姿は見えなくなってしまった、そこには微かな街の喧騒だけが残った。

後を追いかけるのはここまでか、あるいはここが猫の寝床なのかは分からないが、少し残念な気分になって、来た道を帰ろうかと思っ

た。そのとき、先ほどの白猫とは違った、三毛猫が穴の中からひよっこ顔を出した。やはり、この壁の中が猫の寝床であるらしい。そんなことを考

えていると、穴から出た三毛猫が私の方へ寄ってきて足元で伸びをしてから、高い塀に登るようにびよんと跳んだ、するとその前足は中空を蹴って、そ

のまま猫の鉢が夜空に浮かんでいく。

やがて猫の体は遠く、遠く、遙か上空に登ってゆき、やがてそれはぼんやりと光る遊星になった。空に浮かぶ星は空をキャットウォークとして夜の

帳で覆われたステージを優雅に練り歩いたあと、西の地平で猫らしく華麗に着地して、この壁の中に戻って来ているようだった。

ならば、北極星は誰かが背中にもバターを塗ったトーストを貼り付けてしま

ったから、降りてくるのができなくなったのだろうか。そう思った。

—— 今になっても私はあの晩のことを思い出す。今にして思えば、あの

日見た白猫の微かな金色の毛は、あの猫が宵の明星だったからに他ならないのではないだろうか。

今日も太陽が私達より一足先に一日の務めを終えて、空は闇に沈んでいく。

星たちは一日の終わりの気だるさや、明日への微かな希望をその猫目に宿

して、今日もあの壁から空を駆け上がっていく。



a,b,c,d ∈ A A:=the photograph you are watching now
 a:={light} b:={light rain} c:={cycles in-line} d:={quiet night sight}

A [light] あなたが見ているものは街灯です。なんの変哲も無いですが、京都府京都市左京区にある国公立大学の正門付近に存在するという特異性を持ちます。あるいは街灯だと分からなかったかもしれませんが、宙に浮かぶ複数の発光体。なぜ、あなたはそれを街灯だと認識したのですか？

[Q1: why did you realize some light as lamps?]

それはもしかしたら謎の未確認飛行物体が発している明かりかもしれない。この風景の奥は海で、無数の夜光虫が発光しているのかもしれない。百鬼夜行が鬼火を持って歩いているのかもしれない。ききが光っているかもしれないし、吾が光っているかもしれない。そのような可能性が絶たれる理由は何なのでしょう。

B [light rain] あなたの目に入っているものは水滴です。あるいは気づいていないかもしれませんが、なぜ私たちがそこに雨がなくても、降った後だと分かるのでしょ。

駐輪場の屋根が濡れているから、自転車のハンドルが濡れているから、サドルが濡れているから、地面が濡れているから、それは間接的な存在の証明。

さらに、写真の中では黒と白の二色でしか表されない光の粒を、それが水分である、と私たちはなぜ認識できるのでしょうか。それはただ明度の違いに過ぎず、さらにはインクの濃淡の違いに過ぎないのに。

[Q2: why can you realize the existence of water in the photograph?]

水は透明であるのに。写真は二次元であるのに。紙面には油分しか存在しないのに。

わたしたちは直接目に入らない物質をどうやって認識するのか。

C [cycles in-line] あなたが視認しているものは雑多に並べられた複数の自転車です。この自転車たちは、どこから来たのか。自転車は何者か。自転車たちはどこへ行くのか。

そこら辺の大学生がもってきて、それは彼らの私物で、どこにもいかないだろう。と答えるのが普通です。でもそれは、私たちの中には意志がなく、人間の道具であり、それらは勝手に走り出さないう」という一般認識があるから。

[Q3: why do not cycles have their will?]

自転車を構成する要素は無機物だから、無機物は意志を持たないから。意志は有機物にしか宿らないから。意志は心を持つ物にしか宿らないから。どうして鉄の塊が意志を持たないし、肉の塊である人間が断言できるのか。

D [quiet night sight] あなたが注目しているのは夜に撮られた写真です。ここまで読んでくれたあなたならもう分かるでしょう。

これは京都府京都市左京区に存在する、あまり有名でない大学の駐輪場の、雨上がりの夜に撮られた写真である。それは一つの可能性。

これは夜に撮られた写真ではないかもしれない。雨上がりではないのかもしれない。自転車たちは語り合っているのかもしれない。そもそもここは京都某大学ではないのかもしれない。それは破棄されたたくさんの可能性。

その成否を確かめる術は、わたしたち読み手には与えられていません。わたしたちにはただ想像する権利しか与えられていません。その想像が、「慣習を根拠とする妥当性の高い類推」ばかりではつまらないなあ、と、理系のはしくれながら思うのです。

[the last question: WHAT are you watching now?]

意識と無意識 know & unknow

無意識を意識したい

僕はなんでも理由が欲しくなる

なんで、いいのか

なんで、好きなのか

なんで、感動したのか

でも、意識した無意識はなんだか安っぽい

でも、意識しないと自分では創れない

僕はそんな無意識の霧の中を今日も駆け抜ける

もやもやして、じれったくて、近いようで遠い

まねしてみたり、他人に頼ったり

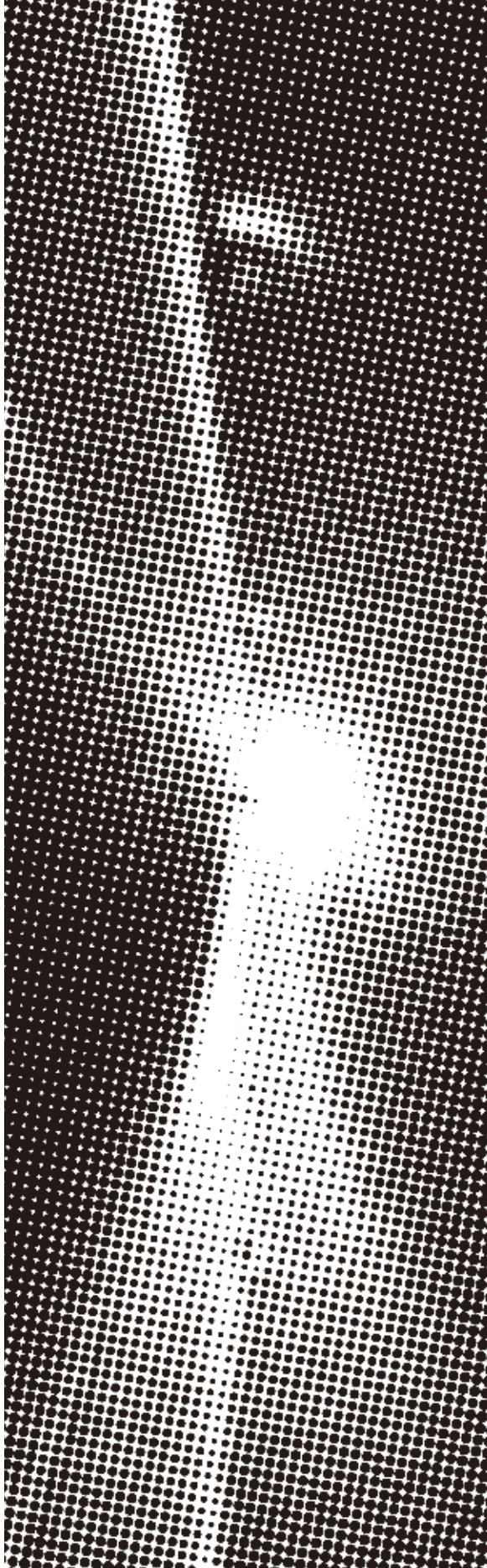
悩んで悩んで悩んで

創って創って創って

ふと、気づく

あれ、意識と無意識ってなんだっけ

いつの間にか意識と無意識は同じものになっていた



前原茉莉子 表紙デザイン

ハクション大魔王!



下出大貴 特集デスク

生きてるー?



松田晃治 ヒーロー、ヒロイン

元の体に戻りたい



中澤誠 特集班

座布団一枚



北浦綾乃 部活紹介

supercalifragilisticexpialidocious



光園和宏 特集班

Hey brother 調子はどうだい?



奥野留惟 教員紹介

おかえり



船橋勇一郎 街角宅急便

コッケコッコー



山田祐輔 特集班

はい



井上祐輝 Ichioshi!

あんた、おいらが見えるのかい?



打谷拓巳 お試し企画

...違うのよ。



川崎梨未 Ichioshi!

うにゃー



安藤大貴 KIT wiz

重くないか、その名前



小澤桂介 生協wYL

さんま



坂根拓海 局長

ニンゲン? 食べたことないですよ、ハハッ。



角居風子 編集長

すごいね



矢野恵美 特集班

きっといいことあるよ、きっと



白倉菜々子 特集班

モッフモフやぞ



八木まどか 特集班

Command S



武内真之 特集班

頑張らなくていいよ



池添展正 編集後記

イッコデス☆



インコに
覚えさせたい
ヒトコト

表紙デザイン 前原茉莉子

ハクション大魔王!

特集デスク 下出大貴

生きてるー?

ヒーロー、ヒロイン 松田晃治

元の体に戻りたい

特集班 中澤誠

座布団一枚

部活紹介 北浦綾乃

supercalifragilisticexpialidocious

特集班 光園和宏

Hey brother 調子はどうだい?

教員紹介 奥野留惟

おかえり

街角宅急便 船橋勇一郎

コッケコッコー

特集班 山田祐輔

はい

Ichioshi! 井上祐輝

あんた、おいらが見えるのかい?

お試し企画 打谷拓巳

...違うのよ。

Ichioshi! 川崎梨未

うにゃー

KIT wiz 安藤大貴

重くないか、その名前

生協wYL 小澤桂介

さんま

局長 坂根拓海

ニンゲン? 食べたことないですよ、ハハッ。

編集長 角居風子

すごいね

特集班 矢野恵美

きっといいことあるよ、きっと

特集班 白倉菜々子

モッフモフやぞ

特集班 八木まどか

Command S

特集班 武内真之

頑張らなくていいよ

編集後記 池添展正

イッコデス☆

